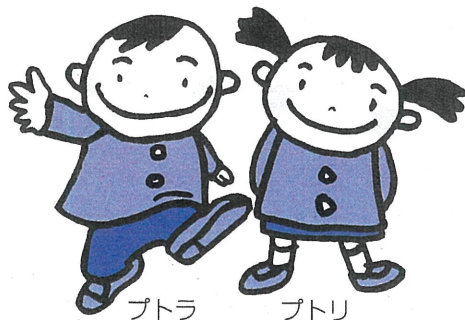


【目次】

さ ほう へん 作法編	5
わ だ しの あ み だ へん わたしの阿弥陀さま編	21
お しゃ が さま へん おしゃがさま編	47
し ん ら ん さま へん しんらんさま編	73
し ち こ う そ う さま へん しちこうそうさま編	99
じ ゅ う に ら い へん 十二礼編	125



プトラ

プトリ

プトラ・プトリの誕生

プトラハンドブックは日曜学校や子ども会このときに「せいてん」といっしょにいつも持もっていきましょう。

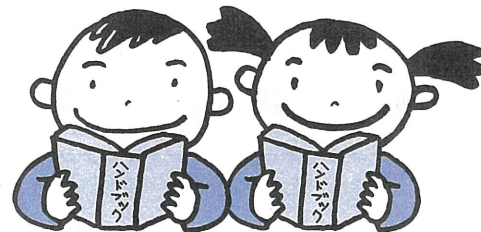
ぼくの名前は「プトラ」といいます。よろしくね。

1998(平成10)年に京都の西本願寺で行われた「蓮如さま500回遠忌ほとけの子どもをつどいー全国大会ー」で、本願寺少年連盟のシンボルキャラクターとしてえられました。

全国のお友だちにぼくの名前をつけてください、とよびかけたところ、たくさんの名前がよせられました。そのなかから「プトラ」というぼくにぴったりの名前をつけてもらったんです。

「プトラ」というのは、昔のインドの言葉で『子ども』という意味です。

ぼくには友だちがいます。名前は「プトリ」です。これからずっと、ぼくたちと仲良なかくしてね。



【わたしの阿弥陀さま編 目次】

- ① 阿弥陀さまありがとう…………… 23
- ② 聞こえる阿弥陀さま…………… 25
- ③ お立ち姿の阿弥陀さま…………… 27
- ④ 蓮の上の阿弥陀さま…………… 29
- ⑤ 背中を見せない阿弥陀さま…………… 31
- ⑥ 阿弥陀さまのサイン…………… 33
- ⑦ 阿弥陀さまの願い その1…………… 35
- ⑧ 阿弥陀さまの願い その2…………… 37
- ⑨ 阿弥陀さまのお国（お浄土）…………… 39
- ⑩ 阿弥陀さまの子ども…………… 41
- ⑪ 阿弥陀さまのお浄土から…………… 43
- ⑫ 阿弥陀さまの願いに生きる…………… 45

① 阿弥陀さまありがとう

浄土真宗のご本尊は「阿弥陀如来」です。親鸞さまは、ご本尊の阿弥陀如来を「南無阿弥陀仏」（六字名号）とも「南無不可思議光如来」（九字名号）とも「帰命尽十方無碍光如来」（十字名号）とも示されています。現在は、名号とそのお徳を絵像や木像として表した形像をもって本尊とされています。

名号の他に形像本尊（木像・絵像）を本格的に本願寺で依用されるようになったのは、覚如上人の時代からといわれています。当時は天台宗の影響真っ只中にあった本願寺ですから、御堂のお荘厳に於いても他宗の影響は免れなかったようです。

しかし、ご安置するご本尊の意味合いは、あくまでも礼拝の対象です。ご本尊安置のお内陣やお仏壇をきれいにお掃除したり、お花を飾りお明かりを灯しお香を焚くなど、毎日の凡夫生活の中にありながら、阿弥陀さまにお給仕をすることは、そのおすくいにお礼をし、お徳を讃嘆するということです。

【おしゃがさま編 目次】

- ① おたんじょう 49
- ② なやみ 51
- ③ 四つの門 (四門出遊) その1 53
- ④ 四つの門 (四門出遊) その2 55
- ⑤ 出家の決意 57
- ⑥ きびしい修行 59
- ⑦ スジャーターのおそなえ 61
- ⑧ さとりを開く (成道) 63
- ⑨ はじめての説法 (初転法輪) 65
- ⑩ 教えを伝える旅 (伝道) 67
- ⑪ 王舎城の悲劇 69
- ⑫ さいごの旅 (涅槃) 71

① おたんじょう

今からおよそ2600年前の、鮮やかな赤い色の花をつけたアショーカ (無憂) 樹が満開に咲いていた4月8日、インドの北にある今のネパール国との国境に近いルンビニーの花園で、ひとりの可愛い男の子が誕生しました。

この男の子は、ガンジス河中流域一帯の中インドにある、カピラという小さいながらも大変栄えている国のシャカ族のゴータマ家の長男でした。

カピラという国の王さまには、ゴータマ家の男の子になる習わしになっていました。この男の子のお父さまであるスッドーナは王さま、お母さまのマーヤーはお妃で、やがて王さまになる王子さまとしての誕生でした。お名前をゴータマ・シッダッタといいます。

しかしお誕生のよろこびもつかの間、お母さまのマーヤー妃はシッダッタ太子をお産みになってまもなくお亡くなりになられたのです。

その後しばらくして、お父さまのスッドーナ王はマーヤー妃の妹にあたるマハーパジャパティを妃として迎えられ、やがて弟のナンダさまがお生まれになられ、ともども大切に育てられたということです。

【しんらんさま編 目次】

- ① ごたんじょう…………… 75
- ② お坊^{ぼう}さまになる…………… 77
- ③ 親鸞^{しん らん}さまのなやみ…………… 79
- ④ 法然^{ほう ねん}さまとのであい…………… 81
- ⑤ 法然^{ほう ねん}さまのもとで…………… 83
- ⑥ 親鸞^{しん らん}さまご流罪^{る ざい}…………… 85
- ⑦ 親鸞^{しん らん}さま関東^{かん とう}へ…………… 87
- ⑧ 関東^{かん とう}での伝道^{てん だう}…………… 89
- ⑨ 関東^{かん とう}でのごようす…………… 91
- ⑩ 親鸞^{しん らん}さま京都^{きょう と}へ…………… 93
- ⑪ 悲しいできごと^{かな なか}の中で…………… 95
- ⑫ 親鸞^{しん らん}さまお浄土^{じょう ど}へ…………… 97

① ごたんじょう

親鸞^{ひ の あり のり}さまの父は日野有範といい、皇太后宮のおそばに仕える大進という役目に就いていた人といわれ、母は一説では源氏の大將義家^{よし いへ}の孫娘^{きつ こう によ}で吉光女であったといわれる。

日野氏は、京都の東南郊外にある日野に領地を有し、ここに法界寺を建て、阿弥陀仏像を安置していた。

■メモ 【日野・法界寺】

京都市伏見区日野西大道町、真言宗醍醐派。開基は最澄といわれ、円仁から薬師像をおくられたので、これを安置するために日野資業^{すけなり}が1051(永承6)年に別荘をお寺に改めた。薬師堂の北にある阿弥陀堂は藤原時代の仏教芸術の代表作とされ、安置されている阿弥陀如来像は国宝に指定されている。幼少時代の親鸞^{しん らん}さまもこの阿弥陀如来を拝まれていたであろう。

親鸞^{しん らん}さま誕生の年は、親鸞^{しん らん}さま自筆の典籍などに年令が記されているので、これから推算して1173(承安^{じょう あん}3)年とされる。

誕生の月日は、1月、2月上旬、4月1日、10月などの各説があり、いずれも江戸時代に書かれた親鸞^{しん らん}さまの伝記にしろされたものである。

現在は4月1日説(太陽暦に換算すると5月21日)がもっとも有力で、本願寺では5月21日を「降誕会」と名付け、親鸞^{しん らん}さまのご誕生を祝う法会を営んでいる。

【しちこうそうさま編 目次】

- ① 恵信尼さま 101
- ② 蓮如さま その1 103
- ③ 蓮如さま その2 105
- ④ 七高僧さま 107
- ⑤ 龍樹菩薩さま【インド】 109
- ⑥ 天親菩薩さま【インド】 111
- ⑦ 曇鸞大師さま【中国】 113
- ⑧ 道綽禪師さま【中国】 115
- ⑨ 善導大師さま【中国】 117
- ⑩ 源信和尚さま【日本】 119
- ⑪ 源空（法然）聖人さま【日本】 121
- ⑫ 聖徳太子さま 123

① 恵信尼さま

親鸞さまは、僧侶として初めて公然と肉食妻帯をされたが、親鸞さまの妻が誰でどんな人であったのかということは、親鸞さまがご自身のことを全くと言っていいほど語られていないので、長い間不明のことであった。

歴史家の間ではその人数を1人とか、中には2～3人まであげられる方もあり、はっきりしない。中でも親鸞さまの妻は、九条兼実の娘、玉日であると長い間言い伝えられてきた。光慧院釋如照（大谷嬉子）さまの『恵信尼公の生涯』（本願寺出版社刊）によれば、この言い伝えは室町時代にできた『親鸞聖人御因縁秘伝抄』という本に初めてあらわれるが、九条家の系図には該当する人物は記載されていない。

しかし、1921(大正10)年10月、鷲尾教導師により、西本願寺の蔵から『恵信尼消息』（手紙）10通が発見され、親鸞さまの妻が「恵信」という女性であったこと、またそれまで空白であった親鸞さまの比叡山時代から関東移住までの様子が明らかになった。現在のところ、はっきりと親鸞さまの妻と確認されるのは恵信尼さまであり、現在の新潟県中頸城郡板倉町辺りに1182(寿永1)年に出生され、1268(文永5)年ごろ同地でご往生されたとされている。

【十二礼編 目次】

- ① まことの仏さまのまことの世界…………… 127
- ② 阿弥陀さまの落ち着いたお姿…………… 129
- ③ 阿弥陀さまのやさしいお顔とお声…………… 131
- ④ 阿弥陀さまと観音さま…………… 133
- ⑤ 阿弥陀さまの限りない大きさ…………… 135
- ⑥ ほめたたえられる阿弥陀さま…………… 137
- ⑦ お浄土にします阿弥陀さま…………… 139
- ⑧ 阿弥陀さまを慕う菩薩さまたち…………… 141
- ⑨ 阿弥陀さまのご説法 無常の教え…………… 143
- ⑩ さまたげるものがないお浄土…………… 145
- ⑪ お浄土は仏さまになる世界…………… 147
- ⑫ みんないっしょに…………… 149

① まことの仏さまのまことの世界

稽首天人所恭敬（天・人に恭敬せられたまふ）

阿弥陀仙両足尊（阿弥陀仙両足尊に稽首したてまつる）

在彼微妙安楽国（かの微妙の安楽国にましまして）

無量仏子衆圍繞（無量の仏子衆に圍繞せられたまへり）

十二礼は龍樹菩薩ご自身が阿弥陀仏の浄土に往生することを願って、阿弥陀仏を礼拝・讃嘆されだ偈頌です。【本書109頁を参照】また善導大師はこれを『往生礼讃』の「中夜讃」に依用しておられます。【註釈版・（七祖篇）677頁】

この偈頌は四句を一偈として全部で十二偈、その多くが阿弥陀仏を礼拝する文で占められているので「十二礼」と呼ばれています。「らいはいのうた」は1948(昭和23)年蓮如さま450回忌の記念事業として「十二礼」を意識したものです。

その内容は、初めに阿弥陀仏のすばらしさを仰ぎたえ、ついで浄土の聖衆の、さらに浄土のすばらしさをたえ、最後にこの法の徳を人々に伝えて、ともに往生しようとして願って結ばれています。

この第一偈で、龍樹菩薩は阿弥陀仏・浄土の聖衆・浄土